



# 情けない。 鉾町は ごみ箱とちゃいます。

ごみを減らし、リサイクルを進めること。  
日常生活でも、不特定多数が訪れる  
イベントで周知徹底するためのコツとは？

01  
エコイベントの  
先駆者たち

## Profile

美しい祇園祭をつくる会  
代表代理  
**松井 恵**さん  
環境保全を考える「京都環境  
アクションネットワーク」代表  
を務め、2006年に「美しい祇  
園祭をつくる会」を結成。祭りの  
ごみ問題に取り組む。

### 山鉾の町に現れる もう一つの「山」

「祇園祭をなんとかせなあかん」。松井恵さん  
がそう思ったのは2005年の宵山のこと。中京  
区壬生に生まれ、祇園祭は幼い頃から夏の一  
番の楽しみでしたが、夫の転勤で長く京都を離れ、  
帰京後も子育てや仕事に追われる中で足が遠

のいていました。そんな頃、海外からのお客様  
のガイド役として何年か振りで宵山を訪れたの  
でした。

鉾町へ足を踏み入れて驚いたのは、足元に  
散乱する大量の使い捨て皿や割り箸、ペットボ  
トルにビール缶。鉾町や露天商の人たちがごみ  
箱を設けてはいますが、入り切らないごみが山  
のようにあふれかえり、もはやどこが回収場所かも

分からない始末。おまけに細い路地や物陰から  
はアンモニア臭まで漂ってくる有様です。



ボランティアスタッフが分別をナビゲート

### 適正な分別のために まずごみを知る

「動く美術館とまで言われる祭りなのに、お客  
様に顔向けできないほど恥ずかしくて…」ごみ  
は分別もされず、袋から竹串が飛び出すなど危  
険を感じた松井さんは、その場で来年に向けて  
行動を起こすことを決意しました。

長年、環境保全を考えるグループと一緒に活  
動している仲間を招集。まず2006年は調査から

スタートしました。山鉾連合会の許可を得て宵  
山の3日間で回収したごみ一つずつ、それぞれ  
針金一本まで仕分けし、ごみの種類と量を分析。  
その結果に合わせて分別しやすいよう、色分け  
したごみ箱を作ることを提案しました。

ごみ箱を設置するだけでなく、その場にスタッ  
フが常駐して分別を案内。箱が一杯になる前に  
ごみ袋を交換することで散乱も減りました。「誰  
かが歩道に置いた空き缶が目印となってごみの  
山ができる。最初の一つを捨てさせないことが  
大切」とパトロールも強化しています。40人だ  
ったボランティアスタッフも今では400人を超え、活  
動も知られるようになりました。

「ユネスコの世界遺産にも登録された祇園祭。  
いつまでも京都人の自慢であってほしい」。松井  
さんたちの活動は続きます。



宵山の鉾町を歩いて散乱ごみをパトロール

## ■コラム

### 「割り箸」だってリサイクルできる！

模擬店や屋台から出る大量のごみ。ごちゃま  
ぜのまま回収すれば焼却処理するしかありませ  
んが、分別すればまだまだ使えるものだってあ  
るはず。例えば割り箸。大手製紙会社の中には、  
割り箸を回収して紙の原料にリサイクルしてい  
るところもあります。イベントで使い終わった割

り箸を集めて、これらの製紙会社に送ると、また  
資源として生まれ変わります。使用済みの割  
り箸を集める際に、「鉛筆立て」のような回収用  
の筒を用意しておけば、束にしたり、その後、乾  
燥させたりする手間も省けるといふもの。リサ  
イクルの輪を広げるほんの少しの工夫です。

## 使い終わったてんぷら油が ステージを照らす

ロックバンドの演奏に、お笑いステージ、のど自慢コンテストなど、ステージプログラムはイベントの華。その舞台を照らすライトを全てバイオディーゼル燃料で発電しようという試みが行われたのは、

# 使った油も 捨てたもん じゃない。

省エネルギーに、省資源。個人では心掛けて  
いるけれど、イベント会場では何ができるのか？  
新しいエネルギーに着目するのもアイデアです。



同志社大学京田辺キャンパス。2009年の「同志社京田辺祭」実行委員会で環境チームを担当した高山俊一さんは「予想以上に大変でしたが、やりがいのある取組だった」と振り返ります。

生物由来原料から作られるバイオディーゼル燃料(BDF)。毎年、このイベントの中で環境問題に取り組んできた同志社大学では、2007年にもバイオ燃料で発電を行いました。この時は発

### Profile

同志社大学  
「同志社京田辺祭2009」  
**実行委員会  
の皆さん**

京田辺キャンパスで行われる同志社京田辺祭。2009年実行委員会で環境を担当した高山俊一さん(右)、井上誠さん(左)、岡本昌子さん(中)。



電機と共に燃料も専門業者から購入しての実施でした。そこで高山さんたちは「せっかくなら原料の回収から挑戦してみよう」と考え、家庭から出る使用済てんぷら油の提供を市民に呼び掛けたのです。

## 2カ月かけた回収作業は 「エコ啓発作業」だった

回収の目標に掲げたのは200ℓ。一般家庭から出るてんぷら油は1回につき数百mℓですから、自炊もあまりしない学生の間だけで集めて賄える量ではありません。イベント当日までの2カ月弱。メンバーは、まず地元市民に呼び掛けることからスタートしました。

チラシを役場に掲示するだけでなく、回覧板で



ステージ照明の電力は全て使用済てんぷら油で発電



当日の会場でも使った油の回収を行った

まわしてもらったり、ポスティングに回ったり、地域のイベント会場へ出かけて行って回収ブースを設け、集めた油と景品を交換しました。もちろん大学周辺のお宅を一軒ずつお願いに回ることもしたと言います。大学の食堂から出る揚げ油と合わせて当日までに集まったのは目標を大きく超える250ℓ。それらは専門業者に委託して精製され、無事2日間、ステージを照らし続けることができました。

「最初は発電が目的でしたが、回収のために一人ずつ説明して歩き、環境への取組について理解してもらったことにこそ、大きな成果があったように思います」と高山さん。

てんぷら油も、人と人との関わりも、まだまだ捨てたもんじゃないようですね。

### ■コラム

## 「ペットボトルキャップ」で燃料を。

イベントやお祭りの会場で大量に出るごみの一つがペットボトル。分別回収でリサイクルにまわすことは定着しつつありますが、もう一つ処理に困るのが「ボトルキャップ」。最近では個別に回収するボックスを見かけるようになりましたが、これを回収し、油化して再利用する方

法があるのをご存じですか？

専用の装置を使えば、ボトルキャップからリサイクル燃料を抽出することができ、それで発電して文化祭を行った学校もあります。「もったいない」という気持ちはアイデアの種なのかもしれません。

# わりばし 一膳の革命。

03  
エコイベントの  
先駆者たち

大量の物品が配られ、消費されるイベント会場。主催者として何を選べばいいのか、ほんの少しの問題意識の中にヒントがありそうです。



## Profile 京都女子大学 SHIBARIWA の皆さん

2009年に10人の学生が学内企業としてスタート。林業と山林の再生を目的に国産割り箸の販売を手掛ける。高桑進教授(中)、渥美志織さん(左)、宮田真優加さん(右)。

シバリワ  
都女子大学の学内企業「SHIBARIWA」の皆さん。現在、流通数の大半を占めている中国製の割り箸ではなく、国産の「間伐材」を活用すれば、国内の林業を再生することができ、荒れはじめている日本の森林を救うことになるというのです。



学内企業「SHIBARIWA」のメンバー

### 安価な輸入品に勝つために 広告営業へ東奔西走

起業のきっかけとなったのは里山の環境を学ぶ高桑進教授の講義でした。国産材の価格低迷で、全国の山林で切り捨て間伐が増えていきます。そこで考え出された間伐を支援するシステムが『割り箸一膳の革命』です。安全で安心できる国産の割り箸の価格は、中国産に比べ約3倍。とても



広告を掲載した箸袋たち

そのままでは太刀打ちできません。

そこで大阪のベンチャー企業と共同で「箸袋」に広告を掲載し、中国産と変わらない価格を実現するビジネスモデルを開発。「食卓エンタ」と命名された商品は現在、学食や飲食チェーン店、イベント会場などに卸されています。

メンバーの渥美志織さんは「広告の sponsor 探しが一番大変ですが、一軒ずつ説明し、思いを理解してもらうことはやりがいがある」と言います。「回収した割り箸を活用するため、山で炭焼き実習も行っているんですよ」とは宮田真優加さん。環境に、林業に、企業に、使う人にと、それぞれの意識を少しずつ変えていくこの取組。一膳の割り箸から始まる革命が、今広がっています。

### 割り箸はエコの天敵!? いいえ、里山の救世主です

イベントのお楽しみの一つといえば飲食ブース。あちこちの屋台をのぞくのは祭りや催し物ならではの醍醐味です。ただ問題なのは大量に出る紙皿に紙コップ、そして何百、何千膳という割り箸

の束…。イベントのエコ化を考えるうえでリユース食器の活用やマイ食器、マイ箸の持参を呼び掛ける主催者が増える中、一方で「ぜひ割り箸を積極的に使ってください!」と呼び掛ける学生たちがいます。

使い捨ての割り箸は森林環境の“天敵”と思われ勝ちですが、「それは大きな誤解」と話す京

### ■コラム ついてますか? 環境ラベル

会場で配布する記念品や使用する物品。エコマークやグリーンマークがついてますか? 近年ではバイオマス(生物由来原料)マークや牛乳パック再利用マークなど、様々な商品・サービスがあります。ぜひ優先的に利用してみてください。



環境への負荷が少なく、環境保全に役立つと認められた商品



古紙配合率40%以上の紙製品



間伐材を使用した製品



製造等にグリーン電力が使用されている製品

**「DO YOU KYOTO?」  
サンガプロジェクト始動!!**

京都議定書の誕生の後、世界中で交わされるようになった合言葉「DO YOU KYOTO?」。「環境にいいことしてますか?」の問いかけは京都のまちにずいぶん浸透してきました。

そんな中、京都のJリーグクラブである京都サン

ガF.C.は、2009年9月にこのプロジェクトの大使に就任。地元で愛され、子どもたちのあこがれの的であるチームが一丸となって環境問題に取り組んでいます。

中でも注目したいのが西京極で行われるホームゲーム。毎回1万人近くの観客が訪れますが、環境への負荷を少なくするため、市バス・地下鉄の利用を積極的に呼び掛けています。ポスター



**Profile**

株式会社京都パープルサンガ  
社長

**今井浩志**さん

1922年に創設された京都紫光クラブを前身とするプロサッカーチーム「京都サンガF.C.」。専務取締役を経て2010年1月より現職。

**行きも  
帰りも  
エコで行こう。**

04  
エコイベントの  
先駆者たち

環境に負荷をかける自動車の排ガス。  
たくさんの方がやってくるイベントだからこそ  
来場者には公共交通を利用してほしい。

やホームページでの告知はもちろん、京都市交通局とタイアップして、チームオリジナルデザインの「トラフィカ京カード」を発行。ゲーム当日、このカードを利用してスタジアムに来ると優待割引を受けることができます。

**選手からサポーターへ  
つなげたい環境意識**

この他にも地元プロスポーツチーム「京都ハンナリーズ(バスケット)」、「京都アストドリームス(女子野球)」と組んで、市バス・地下鉄で3チームの試合を応援に行く特典が受けられる「スタンプラリー」も実施。

マイカーの環境啓発活動も行っていて、昨年



ホームゲームでのトラフィカ京カード先行発売



スタジアムでもエコの呼びかけ

は西京極運動公園を会場に「次世代自動車試乗フェスタ」を開催。選手とファンと一緒に電気自動車に試乗し、その乗り心地を体験しました。また、サンガスタッフ全員が「京(みやこ)エコドライブーズ」を宣言しており、呼び掛け運動では来場者の約1割が登録するという成果も挙げています。

「エコについては、できるだけ選手の言葉で語らせたい。あこがれの選手の言葉なら説得力も少しは高まるはず」と今井浩志社長。また活動を進めるためには、環境について高い意識を身に付け、チーム内に浸透させる努力を怠ることはできない、とも話してくれました。

リユースカップ導入や使用済てんぷら油・小型家電の回収にも取り組む京都サンガ。試合だけでなくエコ活動からも目が離せません。

■コラム

**電車・バスを使いたくなる「エコ特典」。**

公共交通機関の利用を呼び掛けるのはイベントのエコ化に欠かせないポイントの一つ。それを促進しようと「特典」を設ける試みも各所で広がっています。例えば、バス・地下鉄で来場した子どもにすてきな「特典」をプレゼントした大学の学園祭もあります。京都市交通局を

はじめ、鉄道各社が発行している「カード乗車券」をバス代わりにして、楽しいゲームに参加できるというもの。事前にポスターやホームページなどで告知しておけば効果も期待できます。「エコ特典」を考えてみませんか?



# お地蔵さんに エコを教わる 夏休み。

イベントで一つでもエコに  
取り組みれば来た人みんなの  
「学びの機会」になるもの。  
まずは身近な町内から。



## 町の祭りに環境の視点を 取り入れた「エコ地蔵盆」

京都の子どもたちの間で、夏休み終盤のお楽しみと言えば今も昔も地蔵盆。子どもの健やかな成長を願って、町内の大人たちが工夫を凝らして開かれる伝統行事です。お地蔵さんのまわりにはちょうちん提灯がいくつも掲げられ、ゲームや「おさがり」の

おやつを心待ちにしたものでした。

この地域のお祭りに、「環境」の視点を取り入れるプロジェクトが広まりつつあることをご存じですか？京都を拠点とするNPO「環境市民」が提案する「エコ地蔵盆」は、2006年にスタートした取組。「元々はうちの会員の一人が町内の役員をした時に、地蔵盆に環境配慮の視点も入れてみたいと話が持ち上がったのがきっかけでした」と事務局

### Profile

特定非営利活動法人  
環境市民

ボランティアスタッフ

**内田香奈**さん(右)

事務局スタッフ

**岩崎恵美子**さん(左)

1992年、京都で設立。環境のために率先して実践と提案を行っている。



大宮薬師山西町・東町ではリユース皿を活用

の岩崎恵美子さん。当初は1町内だけでしたが、翌年は4町内、今では20町内以上が取り組んでおり、実施のためのアイデアや事例は、冊子『やってみよう!エコ地蔵盆』にまとめられ、手引書として活用されています(環境市民のホームページよりダウンロード可 <http://www.kankyoshimin.org/>)。

## 地域で一緒に育てる 子どもと環境への意識

どんな地域でも昔から町の祭りは子どもにとって社会のルールや地域での付き合い方を知る場でした。地蔵盆は町内が一緒になって環境とまちの未来のことを考える絶好の機会です。

冊子には環境負荷の少ない景品やお供え物を選ぶポイント、ごみ減量のアイデアなどが満載。

添加物の少ないおやつや、それを提供してくれる地域のお店も紹介されています。ゲームに代わって「発電体験」をした町内の事例の他、手づくりの「紙相撲」は電気で動く玩具に慣れた子どもたちには新鮮だったよう。リユース食器を導入した町内では、大工さんが持ち寄った「おがくず」を使ってみんなで皿をふき、水質保全についても考えたと言います。

「環境に向き合えばまちづくりや人権、人とのつながりも考えることになる」とスタッフの内田香奈さん。「とはいえ難しく考えず、最初は“地蔵盆



ハヤシライスのはあとは「おがくず」で油分をふき取り

をもっと面白くしたい”というのでいいと思うんです」。工夫することは楽しく、大人が面白ければ子どももうれしい。そんないい循環に乗ってまちにエコが広まっています。

### ■コラム

## 「京都音楽博覧会」でのエコの工夫。

巻頭のくるりへのインタビューでも紹介した「京都音楽博覧会」。このイベントでは、国際青年環境NGO「A SEED JAPAN」の協力の下、毎年「ごみゼロナビゲーション」が実施されています。入場ゲートでごみ袋を配布し、6カ所に設置されているエコステーションまで持参して

もらうという仕組み。またNPO地域環境デザイン研究所ecotoneと協力してリユース食器を全面導入。スタッフのナビを受けつつ「自分のものは自分で分別する」スタイルが確立され、来場者にエコへの理解が広がっています。